

協議会設立15年

旧ソ連(現ウクライナ)のチェルノブイリ原発事故を機に、広島県・市を中心とした医療・研究機関の連携で、「放射線被曝者医療国際協力推進協議会(HICARE=ハイケア)」が設立されて15年。半世紀を超す被曝者医療の蓄積が、地球規模で広がる核被害者の医療支援に、大きな役割を果たしてきた。被曝地広島から始まった試みを検証する=1面関連。(編集委員・山内雅弥)



被曝者医療 スクラム



ベラルーシに見る

検診システム、軌道

活動結実モデルケース

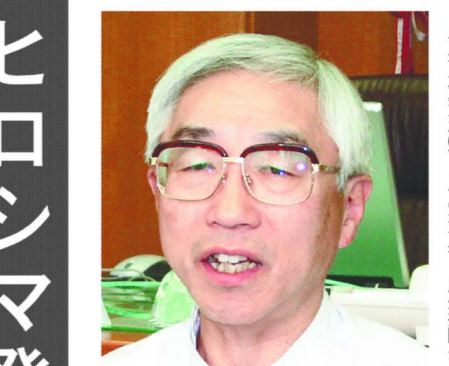
一九八六年のチェルノブイリ原発事故で最大の放射能汚染を受けたベラルーシで、自前の甲状腺がん検診システムが軌道に乗った。HICAREの活動が実結んだモデルケースである。

甲状腺がん急増
ベラルーシ、ウクライナ、ロシアの汚染地帯に暮らす子どもたちの間に、甲状腺がんが異常に増えている。現地に

区診療所のヒラミッド構造
甲状腺がんは、早く見つけ手術すれば治る。旧ソ連で

活動結実モデルケース
万が一、事故時に未検出された甲状腺がんが、成年で甲状腺がんになる恐れがある住民は、約三十五万人。HICAREの協力で、九七年から本格的にスタート

「知識世界へ」に共鳴
「現場での心構え変化」
「地域内分送センター」
「ベラルーシに見る」



土肥博雄会長に聞く

「チェルノブイリ原発事故が設立のきっかけになったのです。核利用事故のリスクが高まる」

「核利用事故のリスクが高まる」

「核利用事故のリスクが高まる」

医療従事者研修を拡充

医療・研究機関に、援助と協力を求める方が多く寄せられた。専門医の研修受け入れや、専門チームの派遣など、それらの機関連系に、費用やスタッフの間、関係者への対応に、核利用事故のリスクが高まる

「核利用事故のリスクが高まる」

「核利用事故のリスクが高まる」



広島赤十字・原爆病院で研修を受けるカザフスタンの医師たち(左から)

県・市・研究機関など連携

「HICAREは、広島を放射線被曝者医療の情報発信基地」という竹下啓之助(当時)の提唱を受け、一九九一年四月に設立された。

広島県・市と県・市医師会、受け入れ機関である広島大医学部、同大病院、同大放射線医学研究所、放射線影響研究所、広島原爆被害対策協議会、広島赤十字・原爆病院が加わる。

海外からの研修受け入れや専門家派遣、講演会や出版を通じた普及啓発が活動の二本柱。受け入れ研修生は十四万二千人(三月末現在)で、他機関から依頼されたケースも含めると千五百九十九人。海外への専門家の派遣も延べ六百六十八人。

県・市が半分ずつ負担約一千三百万円。ピークだった九五年度の三分の一にとどまった。



被曝60周年を記念して、HICAREが広島市で開いた「放射線被曝者医療の国際協力シンポジウム」(2005年9月)

14カ国205人研修受け入れ

「HICAREは、広島を放射線被曝者医療の情報発信基地」という竹下啓之助(当時)の提唱を受け、一九九一年四月に設立された。

支援継続今後の課題

「HICAREは、広島を放射線被曝者医療の情報発信基地」という竹下啓之助(当時)の提唱を受け、一九九一年四月に設立された。

「HICAREは、広島を放射線被曝者医療の情報発信基地」という竹下啓之助(当時)の提唱を受け、一九九一年四月に設立された。

1986年4月 旧ソ連ウクライナ共和国のチェルノブイリ原発4号炉の試験運転中に原子炉が爆発。大気中に飛散した大量の放射性物質でベラルーシ、ロシア、ウクライナが汚染

87年9月 ブラジル・ゴイアニアの病院跡地に設置された医療用放射線源が持ち出され、住民249人が被曝、4人が死亡

91年4月 HICAREが発足
9月 国外研修生の受け入れ始まる
10月 ブラジルからの日系人医師の研修受け入れスタート
同 チェルノブイリ現地調査に当たった広島の専門家による公開報告会を開催

92年2月 米国からの日系人医師の研修受け入れスタート
3月 チェルノブイリ被曝者治療・検診システムの現地調査に、専門家10人を派遣
同 ブラジルに専門家ら4人を派遣
4月 ロシア、カザフスタン、ベラルーシからの研修生受け入れが始まる
6月 広島市の被曝者医療の蓄積を集大成した「原爆放射線の人体影響1992」=写真=を出版

93年8月 ウクライナからの受け入れ研修生第一号。
10月 「原爆放射線の人体影響1992」(要約版)英語版を発行
11月 ロシア・ノバヤゼムリヤ核実験被害関係の研修生3人を受け入れ

94年2月 インドから研修生を受け入れ
6月 ロシア・南ウラルの核汚染調査などに疫学専門家を派遣

95年10月 被曝50周年国際シンポジウム「放射能被曝者医療の現状と展望〜世界の事例とヒロシマの貢献」を開催

96年4月 チェルノブイリ事故10周年国際会議(IAEA、EC、WHO主催)に疫学専門家を派遣
8月 日本語と英語のホームページを開発し、世界に情報発信
9月 第48回保健文化賞を受賞

99年5月 韓国で被曝者医療に従事する医療関係者の研修受け入れをスタート
9月 茨城県東海村の核燃料加工会社ジェー・シー・オー(JCO)再処理施設内で国内初の臨界事故。大量の放射線を浴びた作業員3人中2人が死亡し、周辺住民ら600人以上が被曝
10月 広島大原研や広島赤十字・原爆病院の医師や技師ら9人を東海村に派遣。住民の被曝



線量の測定や健康相談に当たる=写真=同 カザフスタン・セミパラチンスクに専門家らを派遣。住民検診の共同実施と技術指導が始まる

2000年5月 HICARE設立10周年・国際放射線防護学会第10回国際会議開催記念市民セミナー「生活と放射線」に約300人が参加

04年3月 広島大が西日本ブロックの「地域三次被ばく医療機関」に指定

05年9月 「被曝60周年記念放射線被ばく者医療の国際協力シンポジウム」開催

06年1月 韓国で被曝者医療に取り組む医師らの短期研修制度新設で、HICAREと大韓赤十字社が合意

2月 セミパラチンスク核実験被害者への医療支援で、カザフスタン国立放射線医学・環境研究所長から表彰

4月 チェルノブイリ20周年国際会議に専門家を派遣

HICARE15年の歩み

研修生の声

カザフスタン国立医科大学外科助教授
エイソン・ゼクセンバエフさん(47)

韓国・ウレス記念慶礼病院看護師
姜敬淑さん(39)

ブラジル・サンタクルース病院内科医師
デボラ・メリー・オカさん(38)

「知識世界へ」に共鳴
「現場での心構え変化」
「地域内分送センター」
「ベラルーシに見る」

成果もつとアピール

被曝者の一人として、予算が年々減っていくことが残念でない。成果を県民に見せる形でアピールしたい。貴重な被曝者医療のノウハウを世界に発信したい。広島を世界の被曝地の人たちに伝えたい。広島・長崎の専門家と市民の使命。より多くの言語に翻訳して情報提供し、各地で被曝者医療に当たっている人たちが広く研修に参加できるように期待している。

寄付などの仕組みを

「HICAREは、広島を放射線被曝者医療の情報発信基地」という竹下啓之助(当時)の提唱を受け、一九九一年四月に設立された。

「HICAREは、広島を放射線被曝者医療の情報発信基地」という竹下啓之助(当時)の提唱を受け、一九九一年四月に設立された。